ニャル様が行き先を間違えて友人兼眷属の主人公が割りを食う話

ヒイラギP

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルが全てを物語っている。行き先はダンまちです。本当だったら今頃アメリカのどこかで宗教戦争（カルト集団同士）の引き金で遊んでました。

目　次

ハート多用ってそういう事かよ ―― 1
ニャル様の華麗なる休日／新人にこれって酷だろ／役人ステ更新ＤＡＹ ―― 5
戦いの権化／勇気の証明／咲く狂花 ―― 14
拾われて役人 ―― 24

ハート多用ってそういう事かよ

俺は一般的な眷属、旅路役人。友人かつ上司のニャルラトホテプとアメリカ旅行へ行こうとして…ニャル様がやっちまったと言わんばかりのテヘペロをする瞬間を目撃した。転移方法をよく知らなかった俺は、もう既に転移が止められないことに気づかなかった!

そして、光に包まれ、目を覚ますと…世界が変わってしまっていた。

今月の家賃が未払いのままになってしまえば、大家さんにまた命を狙われ周りの人間にも危害が及ぶ。

ニャル様の助言でとりあえずここで暮らすことにした俺は意外と神様が身近な世界だったんで「ナイアルファミリア」と名乗り元の世界に帰る為の時間とお金を稼ぐ為にクソザコファミリアとしてダンジョンに転がり込んだ。

「どぉぉぉぉぉするんですか!?帰れないってどうゆうことです?ＭＰくらいすぐ溜まるでしょう?神格でしょ?」

「いやぁ…今の今まで気づかなかったんだけどさ。なんか僕の神格がランク落ちてるっ

ていうか、縛り食らってるっていうか、とりあえず解決するまでは、僕たちは世界の法則に習って神と子って事で！働いてきてね！」

「あーもうわかりました！行ってきます！いいですか？面白い人見つけても破滅させちゃダメですよ!?」

善処するよとケラケラ笑うニャル様の声を背中に受けて俺はダンジョンへと走り出した。でもこれ言った時のニャル様はろくなことをしないのでゆっくりしてはいられないのだ。大体明後日までの飯代が賄える分の金を目安にして早いうちに帰らなければ…

ぶっちゃけ戦闘はかなり得意だ。何故ならニャル様が何かしら起こすたびにやってくる。俺たちが探索者と呼んでいる集団からニャル様と俺自身の命を守ったり、人類の最終兵器とも呼ばれている大家さんから食費を持っていかれまいと必死に抵抗しなくてはならないからだ。ちなみに家賃滞納している俺らが全面的に悪い。

突っ込んで来る人型の雑魚をロングソードで叩き落とす。二匹目の追撃まで余裕があるので、落としたやつを投げて無力化する魅せプレイを挟む。…誰も見てないけど。上手く決まって乗ってきた俺は、三四五六と雑魚の山を築き上げると、まだ生きている肉の山をロングソードで貫いた。

「あー気持ちいい！爽快な殺戮ってーのは一気にやるって相場が決まってんだなやっぱ！」

雑魚の獣血がキマッた俺はフラフラと奥へ奥へと進む。もうこうなってしまうと、早く帰ろうと思っていたことも忘れている。道中のモンスター達はへへへと気持ち悪くニヤつきながら仲間達を殺し回るキチG@イを前に戦意喪失。つまらないので、雑魚は惨たらしく、普通の奴は普通に、強い奴は限界以上を引き出してから殺す。

「おいおいおいおい！この狼速っ！速っ！でも当てちゃうんだよこれが！緩急つけないと駄目だぞっ！オラァ!!」

「はぁー雑魚がよー逃げやがってよーどこ行った!?…んー臭うなぁ。あはぁぁ、見つけた♡」

「それそれ！おとーさんとおかーさんの仇は目の前だ！頑張れ少年！…ってかオスメスわかんねー。もしかしてお嬢ちゃんだったり？ちょっとふぐりの有無を確認させ、ゲボラァゥェ!!肋逝った！油断した！でも戦ってるって感じする！嬉しい！天国の仲間に自慢してね♡オラァ!!」

ハッとした頃には、ニャル様から貰った。『アイテムが自動で入る禍々しいシャンタク皮のポーチ』がもう魔石で満杯になっていたのだった。

神の眷属なんて事をしている奴がまともなわけがない。…そう！俺は生粋の戦い好きで、一度血を見ると止まらなくなってしまうのだ。

急いで帰らなくては…

ニャル様の華麗なる休日／新人にこれって酷だろ／役人ステ更新ＤＡＹ

じっくり戦いを楽しんでしまったこともあり、とっくに辺りは暗くなってしまった。これは絶対にまずい。今、俺たちの拠点にはニャル様が一人でいる。何をするかわからないという恐怖もあるが、何よりもご飯を作っていないことが気がかりだ。ニャル様には、世界線移動前から俺がご飯を作り続けているから、ニャル様は恐らくご飯を作る能力が低い。大急ぎで街を走り抜け拠点につく頃には、服についた返り血が、鮮やかな赤から黒に近づいてしまっていた。あぁ、洗濯で白に戻るかな。

「すいません！ニャル様！すぐ何か作りますから！」

「おかえりなさい。まずはただいまって言うのが礼儀ってもんだろ？それと、僕はじゃが丸君っていうの食べてるからゆっくりでいいよ。いやーこの世界って神様もバイトするんだねぇ。びっくりしたよ」

「へぇ。神様が、元の世界じゃ考えられないですね。あぁ、でもほかのニャル様の化身とかだったらどこにいても驚きませんけどね」

「ところで、今日は何を作ってくれるんだい？」
「今日は…昨晩カレーだったんで、そのままピラフにでもしようかと」
「えぇ～。カレーの後に何回もカレー風味の何かを連続して出すのやめてくれない？僕飽きっぽいから」
「そんなこと言ったってもうそろそろできますよ」

間食をして、小腹を満たしていたようだが、夕食をとっていないことは確かなので急いでピラフを作り上げる。皿に盛った後にグリーンピースを入れ忘れたことに気づいた。…いやこれは違う。

「ニャル様。用意したグリーンピース全部食べたでしょう？」
「ん？僕知らないよ？きっと用意した気になっていたか、星の精にでも食べられたんでしょ」
「星の精がここにいるわけないでしょう。仕方ないですね。もう食べますよ」
急ごしらえにしては中々美味しかったが、グリーンピースを入れることができなかったのが悔やまれる。

「ニャル様〜。俺の戦闘狂どうにかなりませんか？不便で不便で…」
「うーん。君が望むなら頑張ってあげてもいいけど、それじゃおもしろくないじゃん？それに君のそれは混ざりものの副作用みたいなものだからね」
「…ほんとにたくさん入れましたよね。ほかの神様の下っ端とかも入ってましたけど、大丈夫なんですかね？」
「今の君の本当の姿は実に僕好みで混沌としている。ははは、ただでさえ悍ましいはずの怪物のつぎはぎキメラに元人間の君がなっている。こんな存在僕が易々と死なせるはずないじゃあないか」
「それもそうですね。でもこうしないと、ヒトには時間制限がありましたから。俺はニャル様の眷属兼友人、ですからね」
「ははははは！友人！友人ねぇ、そういえば、『友達になってください』君は僕の本当の姿を見てもそういったんだったね。しかも正気のままに」
「ほかの超的存在にはない何かを感じたんです。今ならわかります。ニャル様は邪悪だけど、歪みながらにして人っていうものを愛してくれている。…照れくさいですね。食べ終わったら流しにお皿置いてくださいね。お風呂沸かしてきますから」

役人か風呂へ向かった後に残った混沌は微笑む。だがそれは、いつもの根源に圧倒的

かつ醜悪な悪意を孕むモノでは無く…

「全く。ここにいるのは悪名高き這いよる混沌だっていうのに、役人は大バカ者だよ」

混沌と、混ざりもの。主神と眷属。友人と友人。奇妙な日常は一つまみのバイオレンスな愉悦に彩られて流れ続ける。

彼はある神に仕える新米冒険者だ。田舎からこのオラリオに出て、３度目のダンジョン探索に繰り出す。いや本当の意味では初めてのことかもしれない。なぜなら、彼のそばには今まで先導してくれた先輩のレベル２冒険者がいない。つまりは、初めて一人でダンジョン探索をするということだ。

彼は先輩からダンジョン内ではごくまれに壁から魔物が湧いて出ると忠告されていたので、前後方はもちろん壁や天井まで注意をして慎重に進んでいく。

おかしい。魔物が一匹たりとも現れないのだ。いぶかしみながらも一歩踏み出すと、ぐちゃりと確かに今までとは違う感触が足を襲った。

驚いて数歩後ずさる。先ほどまではしなかった鉄さびのような匂いが立ち込める。先ほど踏んだ場所を見れば、魔物の死体だった。だがどうしてだろうか。何故まだ死体

が消えていないのだろうか。不思議に思って近寄ると、すぐにわかった。これは生き残りだ。息の音が聞こえる。だがもうじき死ぬだろう。流れた血の量が多すぎる。彼の理性は戻ることを強く推進した。本能すら足をすくませた。それでも、それでも好奇心だけは、彼の背を押すのだ。彼は理性も本能さえも振り切って半ば狂ったように走り出す。

見たのは赤だったそれも最近になってよく見るようになった、基本どの生物にも流れている血潮であった。それが、天井、壁、床すべてを染めた。カァーッと熱くなっていた彼の頭は未知への恐怖に埋め尽くされ、その場から動くことを封じた。

ガタガタと震え、逃げたくとも足は動かない。そんな極限状態は、幸か不幸か、彼にダンジョンの奥から駆けてくる足音を聞いた。ほぅと息を吐く。その人についていけばこの足のすくみも群れる安心感からきっと無くなるだろう。

足音が迫る。まだ姿は闇の中だ。彼はおぅいと声をかけた。足音が迫る。ぼんやりと人影、魔物ではないことに安堵する。足音が迫る。

絶叫した。赤だ。この恐ろしい赤を作り出したものが居た。その者の姿は赤に染まっていたが、外傷はなく、臓物のかけらや、すり潰れた眼球が動くたびに飛び散っている。

殺されるのではないか。と彼は思った。だがそれは杞憂に終わる。赤は走り抜けた。

何か急いでいるようだが、彼に気づく様子もなくそれがまた不気味だった。
もう限界だった。彼は、ダンジョンから出るために走り出す。これを誰かに伝えなくてはならないが、これ以上の探索は精神が持たないと思ったからだ。
走る。恐怖から逃げるように。叫ぶ。足が止まらないように。走って走ってどれくらい経っただろう。彼は自らの家にたどり着く。
安堵して、もう寝てしまおうと、明日このことを主神様、そしてギルドに報告して、それできっと明日からいつも通りだと彼は思い、深い眠りに落ちる。

「この調子なら、面倒なことにはならなそうだ。ゴアゴアとした役人の姿が顔を隠してくれていたようだね」

ニャル様と朝ご飯を食い終わった後に、ニャル様がそろそろいいんじゃないかな。なんていったのでステイタスを更新することになった。
この世界には個人の強さを数字として表すステイタスというものがある。神様たちに恩恵を与えられたものに設定されるらしい。ちなみに経験値の様な物もあるらしく、毎日ダンジョンで殺戮を続けている俺がどれほど強くなっているのか気になるところだ。

「んじゃあ、始めようかささっと背中を向けるんだ」
　軽い返事をして背中を向ける。ニャル様が俺の背中に触れ（本来は違うが）黒い闇が溢れ出す。それもすぐに収まるが、ニャル様は苦い顔をしている。
「またですか？ステイタスの異常…でしたっけ」
「そうそう。本来ならステイタスは０～９９９、更にはＩ～ＳＳＳまでのランクで出てくるはずなんだ。だけど君のは極端に数字が少ないしランクも出ていない」
「見せてもらっても？」
　そういってニャル様の手元をのぞき込むと、そこには

ＳＴＲ８０　ＣＯＮ７８　ＰＯＷ８０　ＤＥＸ７８　ＡＰＰ１７（１）　ＳＩＺ１４
ＩＮＴ８０　ＥＤＵ５００　ＳＡＮ，＄＄＃＃％＃（＃％＃）＃
ＨＰ２００　ＭＰ３５０　アイデア４００　幸運４００　知識９９

　と記されている。元の世界に影響でも受けているのだろうか。にしてもやはり、ＡＰＰとＳＩＺが小さい。ＳＩＺはそのままサイズのことだろうが、ＡＰＰというものがよくわからない。そのほかも大体ニュアンスは掴める。この世界の法則からは外れているだろうＳＡＮとかいう数値には怖いので触れたくもないが。
「どうやら僕か君かはわからないけど、どちらかに問題があるようだね。この世界には

神の力を介さずしてステイタスを開示させる薬品があるようだし、時間が空いたら適当に調達しておくよ」

「ありがとうございますニャル様。それでは今日もダンジョンに行ってきます」

「ゆっくりしてくるんだよ。君の戦いはご飯みたいなものだからね」

「わかってますって。おなか一杯殺してきます」

早くダンジョンに行きたくて人並みの全力で走る。あぁ、きっと人としてダンジョンに殺しを求めるのは間違っているんだろう。でも、もう俺は人ではないしまあいいや。ということでやってまいりました今日のダンジョン！へへ今からよだれが出て仕方ないぜ。

しばらく駆けていると、白い髪をした少年が横を走り抜けていった。ボロボロで今にも死にそうだったが、確かに強い命の輝きをみた。…まるで探索者たちのようだ。ああいうのはニャル様にはできるだけ接触させたくない。

今日は巷のうわさで聞いた牛の魔物が標的だ。めちゃくちゃ強いらしいので早く戦いたい。惨たらしい挽肉にされてしまうのだろうか、牛は俺の拳を耐えてくれるだろうか。そんな期待をしてダンジョンを突き進む。

ゴオオオと叫ぶ牛頭を見てにやりと笑う。見た目強そうだなこの牛。とりあえず挨拶の意味も込めて一発全力で殴りつけてみる。だがこぶしは空を切った。命の危機を

感じて飛びのいたらしい。つまりはこいつも本気で殴れば死ぬということ。興奮していた頭が退屈といら立ちに侵食されていく。今日のメニューはタイマンから変更して虐殺だ。期待を裏切りやがって、覚悟しろよ牛野郎ども!!!

戦いの権化／勇気の証明／咲く狂花

「そこはかとない邪悪さの右ストレートッ！」

尋常でない力で振るわれた拳が牛頭の腹部を抉り穿つ。

「ぐもおおおお」

キャパシティをはるかに超えたダメージを負った牛頭は苦しそうな断末魔をあげて絶命する。

すぐさま体を反転させると、もう使い込まれて壊れかけている剣を取り出して次の牛頭に切りかかる。刃が潰れているので殴りかかる、と言ったほうが正しいかもしれないが。

「ボロボロソードのラストスラッシュ！」

「・・・!?ぐｍ」

不思議なことに刃の砕ける音と共に牛頭がぶった切れる。牛頭はずれ落ちていく自分の頭を押さえようとしたが、抑える腕さえもが切り落とされていることに気づき、なにかを叫ぼうとしたその瞬間に絶命した。刃は潰れているのにおかしなものだ。

「うーん。こんなに弱いと楽しくないなぁ」
不満を隠そうともしないで呟く。暫定レベル1ということになっている俺はレベル2の登竜門とされるミノタウロスに期待を抱いてダンジョンにウキウキ気分でやってきたのだが、あんまりな結果に呆れていた。
嬲って楽しいのは弱弱しいやつでこいつは違うし、だからと言って人間の限界を教え込むような圧倒的な強さを持つわけではないこいつは、絶望的なまでに中途半端だ。
「そうだなぁ・・・そこのガキでも殺せば本気になるかなぁ・・・そこんとこどうなのさ牛野郎共よぉ・・・」
品定めをするように周りと比べて一際小さいミノタウロスを見る。すると二頭の牛頭がけたたましい雄たけびを上げると俺にショルダータックルを食らわせてきた。両親だろうか、それにしても嬉しいこともあったもんだ。あんまりに興奮するもんで即座に立ち上がって近くにいる関係ないミノタウロスをぶっ殺してしまった。
「ぐるあああああああああああああああああああああ」
丸太のように太い腕をそれなりの速度で繰り出すミノタウロス。俺は余裕をもってよけれると踏んだが、
「なっ　がはぁっうぇ」

もう一匹が俺をつかんで無理やり回避を封じたせいでクリ―ンヒットしてしまう。あぁ痛い。この頭を揺らす感覚こそ戦いの醍醐味だ。だが、まだ足りないんだ。お前らじゃ基本的なところが届かない。このまま殴られ続けられても俺を殺すことはない。それは何より戦いから「興」を奪う。駄目だ駄目だ駄目だ！こんなの戦いではない。子供とじゃれるようなものだ。なにか、なにかないものか。

「ずいぶんと殴ってくれちゃってもうまあ、全然死にそうもねぇぞがんばれやっとそらぁ！」

力任せに拘束を振りほどくとゆっくりとミノタウロスに向き直る。お互い力の差はわかりきっているはずなのに一切あきらめるなんて考えていない奴らの様子を見ていきり立つ。さあ死ぬまで殴ってやろうか。

すうと息を吸うと、地面が割れんばかりの勢いで駆け出す。俺の本気を受けたら死ぬと分かったからか、ミノタウロスは一定に距離を保ちながら挟み込むように投石を行おうとしている。はは、甘いわ。ミノタウロスが腕を振り上げてから降ろすその一瞬間に接近し、その腕をとって投げる。石を投げようとしたら自分が投げられていたとあって混乱するミノタウロスに最後の一撃を入れようとするがもう一体の投石が目に当たって体をひねったミノタウロスを見ることができなくて外す。なかなかのコンビプレイじゃないか。今までこんな奴いなかった。肉体同士のぶつかり合い出ないのが残念な

限りだが、これもなかなか楽しいじゃないか。だが
「楽しかったぜミノタウロス。でもな俺も真剣になっちまったからよ・・・今から二十秒待ってやる。そのあと殺すからお前らも全力で来い」
「ＧＧＧＧＧＧＡＡＡＡＡＡＧＩＩＩＩＡＡＡＡＧＲＲＲＲＲＲＲＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!!」
ダンジョン全体が地震のように震える大咆哮。魂を曝け出すかのようなそれにゾクゾクが止まらない。
一秒。２頭のミノタウロスがこちらめがけて全速力で走りだした。
二秒。全速力と全体重全筋力の乗ったダブルラリアットに体がひき潰されるような感触がする。
三秒。すぐさま引き倒され背中に合計四本の剛腕が突き刺さる。
四秒。拳の連打は続き、俺の口から肺から出る空気が鳴らす声が絶えず漏れる。
五。六。七。ミノタウロス達はここで殺さなければ彼らの子が殺されると分かっているから、拳から何かが砕ける音がしてもそれをやめない。
八。九。十。腕が上がらなくなった一匹が今度は足で俺の背中を打ち付ける。半分が過ぎた。
十一。十二。十三。二匹とも足で攻撃をするようになった。限界が近いか。

十四。十五。十六。先に足に移った一匹が攻撃のペースを落とす。ミノタウロス自身も気づいているらしく叫び声をあげてペースを上げるが、無慈悲にペースは落ちてゆく。

十七。十八。十九。ミノタウロスは悔しそうに今までとは打って変わって覇気のない声で一鳴きすると自分たちの子供に向かって。微笑んだように見えた。

二十。ミノタウロス達はお互いの手を取って暗いダンジョンの天井を仰いだ。

「時間切れだ」

突如俺から何本もの触手が体を突き破って飛び出す。それはまるで這い出すようにある程度の長さまで伸びると、うねりながらミノタウロス達に向かう。最後の抵抗か、子供に覆いかぶさったミノタウロスに触手が突き刺さろうとする。その寸前にびくりとまたうねり先端が槍のように変化すると、ミノタウロス達に突き刺さった。

「お前らほんとすごいよ。俺なりの流儀だ。糧になれ」

すると触手がミノタウロスから血液を吸い上げる。じゅうじゅうと音を立てて血を啜ること六秒。不意に触手が抜ける。完全に血を抜いた証拠に倒れ伏した「二頭」のミノタウロスからは一滴も流れない。

ミノタウロスの子供が親に縋りつくと、その体が崩れ落ちる。きゅうと一鳴きする子供を尻目に俺はダンジョンから立ち去る。別に情が湧いたわけではない。二頭のミノ

タウロスの健闘に対する報酬なのだ。
チカチカと透明になる体を震わせると満足げに立ち去ろうと踵を返した俺をにらむその目に俺が気づかなかったのは、上機嫌さは関係ないはずだ。

僕は生まれながらにしてわずかな知性があった。それは僕の両親からの遺伝で誇りあるものなのだと父は言った。優しい母は僕が集団に入るのに苦労するのではと危惧していたが僕にはこんなにやさしい両親がいるのだからと不安に感じたことはなかった。僕の生まれたことを喜んで周囲の同族が祝いに来てくれて、そんな幸せが続くと思っていた。いたのに・・・
気の狂った冒険者の様ななにかがやってきたのは僕が生まれて一月立ったちょうどその日だった。なんという最悪の日だろうか。祝うために集まってくれた仲間たちも、僕の大事な家族さえもすべてこいつに奪われてしまった。
踵を返す奴を今すぐにでも殴り殺したい衝動に駆られるが父、母が敵わなかった奴に今の僕では勝てない。
力が欲しいと望んだ僕の眼前に移りこんだのは両親の魔石。父から聞いた話ではこれを食らい力をつける魔物がいるはずだ。これを食えば…いやこれは家族の、家族？そうだ僕の家族は全員奴に殺されたではないか。だったらこいつを殺さないことには僕

は我慢ならない！
　僕は禁断に手を伸ばした。

「ＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ」
　突然体を鷲掴みにされて対応ができないままに体を壁に打ち付けられる。　この一瞬で内臓が二つほど潰れて吐血する。　いきなりなんだと混乱しているうちに容赦のない追撃が突き刺さる。
「ＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＧＧＧＧＧＧＧＡＡＡＡＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ」
　土煙が爆炎のように広がるほどのラッシュで体のパーツが解体されるような激痛が走り、自分がなすすべもなく破壊されていることを自覚する。　なんだかわからないが最高な奴が現れたぞ。　っでも痛いし抜けだけないせいで最高な奴の顔も拝めないしでこれはいけない。　何とかしなければ。
　そんな思いで触手を相手に向かって急速に伸ばすと何を恐れたのか一気に飛びのいた。　うっとおしい位の土煙が晴れたその時俺は思わずぎょっとしてしまった。　なぜならそこには

「お前あの一瞬でどうやって強くなったんだ?…いや待てよ? 確か俺お前らの魔石の回収してないよなぁ。まさかお前食ったｎっぐあぁぁぁ」

耐えかねるように飛び出したミノタウロスの子供。もう子供じゃないからミノタウロスか。が俺の腹を蹴り飛ばす。二十メートルは飛んだぞどんな筋力してるんだ。だがこれだ。こいつなら俺の全力をぶつけられる。

「いいぞ! いいぞおまえ! 擬態封印解除!」

皮膚が泡立つ、血がうごめく骨格が変わってめきめきと音を立てている。うぞめく触手が背骨を代用し、それを覆う黒い皮膚には血管の様な半透明の管が張り巡らされている。出来の悪い恐竜の様な足に鋭い爪をもつ角ばった腕。頭があるはずの場所には背骨のそれを巨大化したような触手が二本あるだけだった。反発する邪悪な神話の醜い生物たちの接合部にはゼリーの様なものが張り付き均衡を保っている。ここにあるは複合悪性、あらゆる生物を食らい糧とするもの。

「ＧＹＡＨＡＨＡＨＡ!ＩＫＵＺＥＯＩ!」

ぶつかり合う二つの巨体がこの世の終わりの様な振動を響かせあう。ひどく暴力的でありながらどこか原初の美しさすら感じるそれはお互いの体を破壊することでしか成立しないだろう。

ミノタウロスの剛腕がわき腹を握りつぶす。俺の触手が重なり合って巨大な槍に

なってミノタウロスの肩に風穴を開ける。
「YOGUSOTOOOOSUNOOOOKOBUSIIIII」
俺の呪文の効果でミノタウロスが浮き上がりチャンスが生まれる。それを逃していいような戦いではない。強く拳を握り、腕を引き絞る。そして放つラッシュは機関砲のごとき爆音と破壊をまき散らしてミノタウロスを襲う。
「GGGGGGGIIIIIIIIIIIIIIAAAAAAAAAAAAAAAAA」
たまらずに悲痛な叫びをあげるミノタウロスだがそれだけでは終わらない。無数の触手が追い打ちをかけたのだ。ミノタウロスは両親が干からびるさまを思い出して必死に自分に追いすがる触手を引きちぎる。
「ITEEEEEEE!DAGAKOREDEOWARIDAAAAAAAAA」
激痛に負けることはそのまま勝機を失うことだと自分に言い聞かせてさらに触手攻撃を苛烈にする。
俺もミノタウロスもここで負ければきっと勝機を失うと本能が叫んでいるのを感じたのか限界を超えた拮抗。
徐々にミノタウロスが触手に対応できなくなっていく。なぁミノタウロス、勝利の目神はいないが、飛び切り邪悪な神様なら俺にはついてるんだぜ。

「KUTTEYARUUUUUUUUUUUSINESINESINEEEEEEEHAHAHAHHAHAHAHAHAHA!!!!」

最高の食事にハイになりながら転移前にも感じたことのない絶頂感に身をゆだねる。触手達が余すことなくミノタウロスを食らいつくすまでずっと笑いが止まらなかった。

この世界に来たのは間違いなんかじゃない。これは最高のめぐりあわせだ。

「そろそろ、帰らないとな。心配かけちゃったかな・・・」

ここに来て出会えた最高の相手の魔石を例のシャンタクバッグ…は道中でいっぱいになっていたため、予備のバッグに入れた後、痛みに震える体を引きずって、ダンジョンの外へと歩き出した。だが、目の前がかすんで前に出そうとした足が動きを止める。おかしいなと思っているうちに糸が切れた人形のように地面に倒れ伏した。

「これはまずいな…意識まで無くなって・・・」

久しぶりにあの姿になったことや、積み重なったダメージからか、まるで麻酔をかけられたかのように一瞬に意識を失ってしまった。

拾われて役人

「ねぇ！君は他の生徒みたいに校庭で踊ったり、互いに訳のわからないことを叫びあったりして狂ってしまわないのかい？」

教室の中でこの惨劇に一枚かんだことは間違いない女性が俺の顔をのぞき込む。そして何故俺が狂わないのか、なんて聞いてくるんだ。まったくもって無責任だ。狂えるなら狂ってしまいたかったのに。そうしたら昨日まで隣の席で話をしていたやつが水を入れ続けた水風船のようにはじけ飛ぶ姿なんて見なくて済んだし、厳しくも丁寧な授業をしてくれることでみんなに人気のあった先生が、気味の悪い、いやらしさが張り付いたような表情で言葉の暗黒を振りまきながら窓から自殺を図ることもなかった。そんな中でそれがおかしいって言ってるのは自分だけで周りのやつらはから回った眼球で俺を見ながら「％＄＄Φ＃％＄△＄％＃＄＃＃」なんて口をそろえて言うんだ。何言ってんだかわからないって。

「俺はなんか大丈夫です。でも安心しました」

確かに無責任な女だけど、この人の発言が今の俺の支えになってるのがわかる。当の本人はなにが安心かわからないとでも言いたげな目をしているが。

「安心？こんな状況下で何に安心するんだい？」

こてりと首を傾けて自分の疑問をぶつけるその人に笑いかけて言う。

「あなたが『狂ってしまわないのかい』と聞いてくれなかったら、ずっと俺は何が正気で何が狂気かわからなくなってしまったままだった。あなたが俺の正気を証明してくれたんだ。あのままじゃ学校の人とは別の意味でおかしくなってたかもしれないよ。ありがとう。」

たとえこの大惨事にあなたが関わっていようとね。と最後に一言付け足すと女性は一瞬間だけ驚きを見せたが、すぐに笑顔になった。あぁこの表情は毒なのだろう。俺には甘すぎて頭まで回ってもう致死量だ。この笑顔がもっと見たいと思った。この人のために俺がしたいこと、できることはなんだろうか。考えても仕方ないのに答えなんてきっと出すもんじゃない、碌なことにならないって直感でわかってるのに、俺の運命を信じる少し少年な心が温かな南風を予感して突き抜けた。

女性はもう扉に手をかけて教室からいなくなりそうだ。急いで呼びかける。

「あ、ッ待ってください！」

女性が振り向く。そんなことだけで空まで跳ね上がりそうな位心臓が自己主張してくるのがうっとおしい。校庭の血まみれ先生がその命を使い果たして静かになるのと同時に意を決して半ばダメもとで言う。

「またここで、友達として会いましょう。ぁ、あの、まともな人、二人だけだし、俺心細いしで・・・どうですか?」

うまく言葉が紡げなくて、言いたい言葉だけが溢れてくるからしどろもどろで情けなくて、冷汗がつぅと流れ落ちる。女性はさっきとは比べられないくらい驚いて、それはもう口をあんぐりさせて数秒間固まってしまった。何か変なことでも言ったのかと思っておろおろしていると、女性は笑った。それはもう子供みたいに、口を開けることを恥ずかしがる様子もなく腹を抱えて、あははと大声で壁をゴガンゴガンとグーで叩きながら校舎を揺らして笑った。

「笑わないで!冗談で言ったわけじゃないよ!本気であなたとここでまた友達として会いたくて、いや!ここでだけって訳じゃなくてあなたが嫌になるまでずっと友達になりたいってことでって何言ってるんだ俺、恥ずかしい」

今まで友達がいないわけじゃなかったのにこうして空回りして暴走してしまうのはきっと、自分から友達になって欲しいなんて一度も言ったことが無かったからじゃあないかと思う。今までは自然にできているものだったから自分から言うなんて照れくさい。散々笑った後すぅはぁと深呼吸して、それでも時々笑いを漏らし、女性は息も絶え絶えになりながらもわかってるからと弁解し、

「いやぁ、こんなのレアケース中のレアケースだ。僕の悪意の中で平然としているうえ

に友達って、君よく変人って呼ばれるでしょ。絶対そうだ。うーん、楽しませてもらったしいいよ。僕たちは僕が飽きるまでずっともだね」

君は耐えられる?と挑戦的な目をした女性は後ろのドアからするりと抜け出し、廊下を走って前から入る。そして目に入ってくる光景に驚いた俺は、足が絡まって机を倒しながら盛大に転倒する。大げさだと思うかよ、でも仕方ないだろだって

「さっきまで女の人だったよね?間違いないはずうん。でもってなんでイケメンになってんだぁぁ!?」

「ふふふ、よろしくね。僕の人間のお友達一号君」

校庭と隣の校舎の狂人たちの声が聞こえないくらい、この不思議な出会いに俺は高鳴っていた。

「んんんー・・・懐かしい夢を見たぞ。本当に懐かしい。よりにもよって人間だったころの記憶か、あの姿になったの久しぶりだったからな。精神が人間のままでいようとして夢を見せたのだろう」

ベッドから降りようとしたときにそう言えば自分たちの家は布団だったなと気づく。

となると一つ不可解なことがある。それはもちろんここはどこなのかで、だんだん目が覚めてくると部屋の広さも窓の外の景色も何一つ一致しないことが分かった。おそらくというか絶対に誰かにダンジョンの中で倒れていたのを助けてもらった類だろう。

起きてから十数分か経って、状況整理が終わり家主にお礼を言って立ち去ろうとした時だった。

「あれ、もう目を覚まされたんですか。よかったです」

入ってきたのは、男にしては小柄で、白い髪に赤い目。そして何より、その赤い目の中にある強い意志がこの世界の中でも非凡なものであると分からせるのに十分な命の輝きを秘めていた。それはまるで元の世界の探索者たちのようで、というか俺は忘れていない。ミノタウロスを倒しに行ったときに隣をすごいスピードで走り抜けた奴だ。

「はい。ベッドを貸していただいてありがとうございます。お礼と言っては何ですが、何か手伝えることはありますか？」

とにかく、お礼は欠かせない。何かいいことをしてもらったら何かして返すのは人間時代からの俺のポリシーなのだ。ついでにこいつがニャル様に害をなす存在か見極めておかなくてはならない。こっちが本題ってわけじゃない本当だ。

「ええと、ついさっき起きたばかりなのですし、もう少し休んだほうがいいですよ。朝ご飯ができたら呼びますから、本調子になるまでに何か手伝ってもらうこと見つけておき

ますね」

そう言うと、家主は部屋を出て行った。それにしても物腰の柔らかな子供だと思ったが案外頑固者というか、あの赤い目が部屋から一歩も出るなと言っているかのようで、俺としたことが気圧されてしまった。

ふと部屋の隅に目をやると、俺がダンジョンにいた時の装備がそのまま置いてあった。家を汚したくないだけかもしれないが、付いていたはずの泥や埃の汚れが多少取り払われている。もちろん中を確認したが、いじられた形跡はなかった。そもそもシャンタクバッグは俺とニャル様以外には許可なしでは開けられない特性があるので取られる心配がない。だが今日はいつもとは違って予備のバッグにあのミノタウロスの魔石が入っているのでそれだけが心配だったが、それも無事に手元でキラキラ輝いている。

ほうと一息ついてベッドに腰掛ける。そして魔石を眺めながらミノタウロスとの激闘に思いを馳せる。家族の亡骸でもある魔石を食って自身を強化したアイツはそこいらの魔物より圧倒的に強かった。あのまま人間体で殴られていたらあっさり死んでしまったことだろう。

更には擬態封印を解除したときには高ぶっていて気づかなかったが何者かに力を押さえつけられている。本来なら呪文なしで好きなように魔法も打てたはずだし、ほかの形態にはなれる気配すらしない。俺に組み込まれた邪悪な生物達が総じてその真価を

封じられているせいもあってか通常形態の能力も半分くらい死んでいた。
　試しに擬態封印を限定解除して槍の創造を使ってみると問題なく発動した。肩辺りから飛び出した触手が鋭利な矛を持つ槍に変わる。槍を消して、次は体組織のゲル化を試そうとしたがこれがどうも上手くいかなかった。別形態への変化もこのあたり、ショゴスと呼ばれる怪物の能力に異常をきたしているらしい。うろ覚えだが血液を用いた透明化、これは星の精の能力だが、これは透明化する時間が少ない。これは余談だが星の精は基本透明で吸血をすることでその姿を現す怪物だ。ニャル様はこの怪物に『反転する』術式を使ったとか存在の定義に虚数を割り込ませるだとか何とか言っていたがよく分からなかった。
「朝ごはんで来たので呼びに来ました。えーと、どうお呼びすればいいですかね」
　赤目の少年が訪ねて初めてまだお互いの名前も知らないことに気づいた。これはいけないと少年に自己紹介をする。
「俺は役人と言います。先日は助けていただいたようで申し訳ない。あなたの名前は？」
「昨日のことは気にしないでください。僕はベル・クラネルと言います。よろしくお願いしますヤクトさん」
　ベル・クラネル…かこの世界では横文字っぽい名前が主流なのか？だとしたらミスか

もしれない。もし勘のいい相手だった場合は違和感を持たれたら長いこと、下手したら一生怪しまれることになってしまう。

「ベル・クラネル・・・うん、ベル少年、ベル少年と呼ばせてもらってもいいか」

ベル少年はどう呼んでも構わないと快諾し、食卓へと俺を案内する。すでにテーブルには先客がいるようでスプーンや食器の奏でる音が聞こえてきた。そこへと視線を向けると、・・・

はっ！理解しがたいものを目撃したせいか思考回路が一瞬働くことを嫌がった。なんと言うことか、俺の目の前には、肩を出し、胸を強調し、長い髪を頭の両側で纏めたつまりは痴女がいたのだった。しかもこの気配、神様である。この世界に来て驚いたことの一つに神様の肉体が思いっきり人間スケールだということがあげられる。俺自身ニャル様以外の神様を近くで見るのは初めてなので、改めて元の世界とは神様の在り方が違うのだと驚かせた。

そんな感じでベル少年のファミリアの主神をじろじろ見るのも不敬かと思い、

「あーえっと、ベル少年に助けていただいた役人と申します。この度はご迷惑をおかけしました。この度は食卓を共にさせていただきたく・・・」

「そんなに硬くならなくていいよ。たまにはお客さんが来るのも賑やかで悪くないさ」

包容力を感じさせるその言葉にこの神様が俺のことを拒絶していないことが分かっ

た。このファミリアは主神も眷属もお人よしのようだ。
「ところでヤクトさんはなぜあんな所で倒れていたんですか?やっぱり魔物に?」
ベル少年が訪ねる。まあ当然の疑問だろう。嘘をついても仕方ないので素直に答える。
「ダンジョンにいた強い魔物とタイマンはっ・・ごほんっ、一対一で戦っていたのですが、戦闘で負ったダメージが思ったよりも大きくて、勝利は収めたのですが力尽きてしまいまして。いやぁあのままでは死んでいたかもしれなかったので、本当に感謝しています」
過程のことは一切話さない。魔物相手に虐殺決め込む人間なんて警戒されるに決まっていることくらい想像に安い。流石に看破されないだろうが、神様相手に隠し事をすることに無意識ながら抵抗があるのか冷汗が出てきた。これもニャル様と積んできた経験が生存本能と強く結びついたおかげだろう。全然うれしくない。
「でも、ヤクトさんがいたのは大体九階層目でしたよね。いったいどんな魔物がいたのか聞いてもいいですか」
もし上層で強力な魔物が出たとしたのならば、危険なので情報が欲しいといったところだろうか。朝ごはんを食べながらでもとベル少年に進められるがままに「いただきます」と言ってから食べ始めた。焼いたパンとそれに挟まったハムは若干質素ながらも安

心を与える味で徒党を組んで感情的な美味に作用する。元の世界で食べた朝食のそれを思い出して、それに付いてくるように大家さんと家賃のことも思い出した。
「それでどうなのさ。ヤクト君、君を気絶まで追い込んだ魔物っていうのはどんな奴なんだい？」
口に残っていたパンとハムを飲み込んで、水を一口飲んでから、その魔物がミノタウロスであること、賢くて力も他と比べて段違いであったことを説明すると、ベル少年がぎょっとして
「ミ、ミノタウロスゥ!?ヤクトさんはミノタウロスに勝ったんですか？」
と身を乗り出さんばかりに聞いてくるもので、これは因縁でもあるのかなと思い、ベル少年の中でミノタウロスの価値が下がらないようにフォローしようとして、
「はい、やはりとても強かったです。俺途中で壁にめり込みましたもの」
なんておどけて見せたが、そんな攻撃食らってなんで生きているんだ的な目線を二人共から受ける羽目になってしまった。
そんなこんなで朝食を食べ終わった後ベル少年に予備のバッグに入っていたあのミノタウロスの魔石を見せてしまったのは、やはりベル少年が見るもの見るものに正直なリアクションをしてくれるので、気が大きくなって自慢したくなってしまったからに違いない。

うん。やっぱりこの魔石は綺麗だ。

昼過ぎごろになってベル少年の主神が働きに出るというのでここぞとばかりに手伝いを申し出た。これでもアルバイトはやってるほうだったし、嫌いでも無かった。

「手伝ってくれるのはいいけど、いいのかい？君はお客さんなのに」

とベル少年の主神が気にかけてくれたが迷惑がられていなければそれでよいのだと言って、ダンジョンに行くからと席を立ったベル少年とも一緒に外に出た。